



天授の子

川端康成



新潮社版

てん じゆ の こ
天 授 の 子

價1200圓



昭和五十年六月五日 印刷
昭和五十年六月十日 發行

著 者 川 端 康 成
か へ だ けい なる

發行者 佐 藤 亮 一
さとう りやういち

〒162 東京都新宿區矢來町七一
發 行 所 株式會社 新 潮 社
しんそう

電話 業務部東京(03)三六六・五二二
編集部東京(03)三六六・五二二
振替東京四一八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

目次

故園……………五

東海道……………八一

感傷の塔……………一九五

天授の子……………二二

解説 佐伯彰一……………二七四

覺書 川端香男里……………二八三

裝幀
東
山
魁
夷

天
授
の
子

故

園

一

子供をもらふために、三月十二日から二十二日まで、京阪地方へ行つて來た。その十日間のことを、少し拾ひ書きしてみようかと思ふ。

子供や縁者に迷惑でない範圍のことしか私はよう書かぬのだから、これは小説でもあるまいし、眞實の記録でもない。作家としては、怯懦であり、欺蔽である。のみならず、行文の感興までも必然に抑制しなければならぬ。書いてゐるうちに想像が働き出して來ても、その翼に乗つては、實在の人を歪めることになる。肝腎な事實は大方省かぬと、子供のためによくないことになる。ありのままにも書けないし、好きなやうにも書けない。

それなのになぜ書かうとするのか、自分でもむしろ不思議である。

一體に私は自分のことは書きづらい。自分のことを書かうとする自分に、先づ疑惑と厭惡とを感じる。それが作中人物の私をいやな人間に書かせる。つまり、自分のことを書かうとする自分のいやさを、作中の人物の自分をいやな人間にすることによつて、まぎらはすのであらうか。作家としての難澁に、せめてそれで絲口を見つけるのであらうか。さうでもせぬと、いつまでも踏み出しがつかない。言はば、癩癩の餘りのやけくそであり、惑亂の餘りのあきらめである。さういふ風にして書いた作品も、時々あつた。さういふ作品のなかの人物を、實在の私と誤解されることも、時々あつたのは無論である。強ひて自分とは逆に書いた場合でも、辯疏すべき筋はない。しかし、茫漠としたさびしさを感じる。誤解されたためではない。ものを書くといふことはかなさに通ふやうなさびしさである。

誤解に對する辯疏の點では、考へてみると、最初から萬全である。自分の経験を潤色しながら、自分を書いたのではない、自分はこんな人間ではないといふのである。それが偽惡を装つてゐるから尙狡猾である。しかし、あらゆる自己告白は偽善か偽惡かに傾き、自己宣傳と自己辯護とを免れぬものであつて、これをつきつめてゆくところに、告白を偉大にする源の一つもあるわけだが、私はまだそれを本氣に志したことはない。偽惡も辯疏も意識してといふほどではないので、極めて薄弱である。つまりは、自己を究明しようとしたことも、自己を告白しようとしたこともないのである。自己を書いたためしはないのである。自分を人に押しつけがましい、あはよくば後世にまで自分を押しつけようとする、文學者でありながら、私は自分が忘却の世界に消え去るといふ空想に、恍惚とする。日本の詩人の流れであらうか。宗教でも、日本の僧侶は血なまぐさ

い懺悔録は遺さなかつた。

自己を書いたためしがないとは、また人間を書いたためしがないことである。自分の経験を書くのに、ややもすると、その自分の性格や心理を逸らすのを見ても、私は堅固な作家とは言へまい。自分を多少いやな人間に戲畫化することによつてもとめた絲口などは、よこしまな道に向つてゐるにちがひない。さうした作中の自分に對する憎惡も淺い。人とし、作家としての懈怠に過ぎまい。作品はいやみで、後味が悪い。泣きゆがめた顔のやうなものかもしれない。わがさがのつたなさを、嘔泣きして見せたのであらうか。

私は人を憎めぬたちなので、まして、自分をまともには憎めるはずはない。作中の自分に對する憎惡と言つても、修辭の遊びを出てゐないだらう。作品がすでに修辭である。實在といふものが言葉といふもので現せるのだらうか。それが自分自身の問題になつて來る時、自分の姿はああでもない、かうでもないと思ふ。しかも、言葉によつて思ふのである。言葉によつて思ひながら、言葉と實在と、なんのつながりがあらうかと思ふ。實在はわれわれの言葉の彼方にある。言葉でどこまで追つかけて行つても、なほ彼方にある。實在の自分を言葉でよごしたくないやうである。自分を書かなくても自分はあり、書かない方が自分は美しく確かに存在する。その自分は大事にしまつておいて、自分のいやな戲畫を書くつもりにならぬと、言葉など使へないやうである。言葉そのものが戲畫でしかない。自分を書かうとする時の疑惑や厭惡は、かういふ由來もあるかもしれないぬ。無論、こんな考へは文學の陳腐な問題であり、近代の病弱に過ぎない。自我の虚榮心でもある。いつの頃から私に、自分を素直に書きにくい癖がついたのか。淺い夢に迷ふことである。

ところが他人をモデルにすると、私は素直にしか書かぬやうである。自分の場合とちがつて、他人をいやな人間に歪めて書かうとは思ひも及ばないし、他人の祕事や缺點を書くことも私には出来ない。甚だ微溫的で、作品の骨もあぶら氣も抜ける。作家としていよいよ弱小の思ひをする。従つて私はモデルのある小説をほとんど書かない。人の迷惑をおそれるからでもあるが、自分の觀察が正鵠を得てゐるとは信じられぬからである。的を貫いてゐても、それは一點に過ぎない。自分で自分を見てさへ、ああでもない、かうでもないである。まして他人の眼である。また、よしんばまちがひなく見てゐても、それを言葉に移すと、實在を離れる。しかも、當初から言葉によつてしか、人を見るすべはないのである。他人を書けたなどと思ふ倨傲が、作家にゆるされる道理があらうか。人間の深淵の上皮を掠めて通るだけである。實在が實在するのを脅かす力は作家にない。

しかし、實在といふものを、私はさう簡單に信じてゐるわけではない。多分に疑はしいと思ふ。それが隅から底までいつも見えてゐて動かぬなら、人間に言葉の必要もあるまい。實在の人間を書かうとする場合に、私が難澁し、萎縮するのは、實在に對して不心得な私に、實在が懲戒を加へるのだらうか。その鞭で私は實在の外に叩き出されてゐるのかもしれない。言葉の不確かさに、私は惑亂して癩癩を起すが、言葉が不確かだといふ絶望的な恐怖は知らぬから、言葉を弄んで生きてゐられる。不確かだから、言葉のゆくところは悉く實在に通じると、あまつたれてゐられる。言葉と實在との境を、勝手に取りはづしてしまつて、虚空に舞ひあがらせてゐるらしい。實在は影が薄れて、縹渺と行方も知れぬ。天から歌聲が聞えるだけである。無論私は實在の復讐を受け

ずにはゐないだらう。實在の外に叩き出されて、實在でなくなつてゐるのかもしれない。現實の生活から追放された道化師は、救はれぬ身でありながら、救はれぬ心を覺らない。身を捨てたおかげで、この世に光明が遍在すると思ひちがひしてゐる。死後にまでざれ言を遺さうとして、いつ黙るのであらうか。

子供をもらひに京阪地方へ行つたことを書くのが、私はなんとも言ひやうなくいやである。書かうとする自分をあさましく思ふ。それでかれこれ理窟を並べ、修辭の遊戲に耽つてみたが、したりげな辯疏を重ねてゐるに過ぎないし、虚妄の言葉ばかりなので、一層いやになる。

なぜ書かうとするのか、自分でも不思議である。

子供をもらつたといふ事實に對して、それを書かねばならぬ必要を、私は今なにも感じない。事實を大切にすることは書かぬことだと思はれる。子供はうちへ來て二十日以上になるが、苦勞は一つもない。むしろ拍子抜けしたほど氣樂である。平和であり、幸福らしくもある。ところが、書いてみようとする、始めて不安に似たものを感じた。果して子供をもらつたのであらうか。いつたい子供をもらふとはなにであらうか。ふとそんなことを思ひ浮べる。これが眞實といふ習はしでもあらう。しかし私はこの習はしを尊んでゐない。この習はしに痛めつけられて來て、やうやく脱け出たのでもない。だから、思ひ浮べたところで、猿真似に過ぎまいし、深くは考へてみもしない。また、考へてわかるのなら、事實は存在しないだらう。私は事實そのものでありたい。現に子供はさうであり得てゐるらしい。ところが、私は事實をちよつと離れて眺めてみようとした。書くことは事實のなかに入ることだとは、私も文學の效能書には言ひさうだが、自分の

場合の慰めには出来ぬ。事實を弱めるために、私は書くのではないかとさへ、疑はれるほどである。

二

私が門口をあけるなり、えらい足音で駆け出して来た子供は、怒つて顔を眞赤にして、
「おそいなあッ。」

と叫ぶと、兩手の握りこぶしを肩まで振りあげて、私をなぐるやうに抱きついた。走つて来た勢ひで、玄關の上から下の私をなぐらうとしたから、子供はたたきに落ちて、私に抱きついたわけだが、私の體に感じたのはなぐるやうにして抱きついた子供であつた。

私は少しよろけて、

「ごめん、ごめん、おそくなつてごめん。」

と、眞剣に詫びながら、子供の肩を抱いた。子供は私の胸で、いつときじつとして、呼吸を静めた。十二歳の女の子だ。

約束の時間より二時間半も、子供は一生懸命に待つてゐたので、私共の足音がすると、わつと泣くやうに飛び出して来たのだらうが、この子のこんな愛情は、私には全く不意だつた。私の妻もはつとして、私の顔を見た。この子をもらふことに大方話はきまつてゐても、私は三四度ちよつと會つただけだし、妻は昨日會つたばかりだつた。顔を眞赤にして、なぐるやうに抱きついて

來ようとは、思はなかつた。

その子供の體は、私にぶつつかると同時に、もうやはらいであた。私も子供といつしよに、なにかひたむきに甘い安心をしたやうだつた。

直ぐにそこへ子供の母親が出て來た。やはり、外出の支度までして待つてゐたらしく、コートを着てゐた。

「どうもおそくなつて、申譯ありません。昨夜、宿屋へお客が來てその人が泊つて行つたりしたもんで……。」

と、私はあいまいないひわけをした。

「ほんとにすみません。」

「いいえ。あんまりおそいから、今日はもうおいでやないのか思つてましたの。」

「今、民子ちゃんに、えらい叱られてるところです。」

「ええ。」

そして、母親は笑ひながら、

「民ちゃん、もう今朝から三遍も停留所まで、お迎へに行つたね。」

と、子供に言つて、

「それでもうくたびれて、寢てしまつたの。電車の音がするたびに、あれやろか言うて、むくつと起きるんですけど……。」

「惡かつたね、ごめんなさい。」

と、私は子供の手首を握つて言つた。妻も私のうしろから子供の母親に詫びた。

「おそくなりましたが、直ぐ出かけませうか。」

と、私は母親に言つて、子供を促すやうに、

「さあ行かう。」

そして、子供が靴をはくのを待つてゐた。子供は手早くしながら、その手にもまだ動悸が打つてゐるやうで、うまく紐を結べなかつた。

「はい、帽子。」

と、私は子供の頭に載せた。

妻は門口を一足はいつたところに立つてゐたので、先きに出た。

「蜜柑をあげよう、か。少ししかないよ。」

と、私は外套のポケットから、網の袋にはいつた蜜柑を出して、子供に渡した。

一昨日の朝、鎌倉をたつ時、四袋ほど買った、食べ残しだつた。驛賣りの蜜柑を見つけると、「大阪の坊やに持つて行つてやつたら、喜びますわ。」

と、妻は言つた。

妻の妹が大阪で乏しい暮しをして、時節柄子供のおやつにも随分困るらしいので、東京のきやうだい達は、なにかと送つてやつてゐるのだつた。こんども妻は、他人には失禮で土産にならぬやうな、粗末な食料品をわづか持つて來てゐた。

その蜜柑を、汽車のなかでも食べ、席を譲り合つた海軍の將校にも一袋やり、宿屋でも菓子が